

一宮市三岸節子記念美術館

# 三岸節子〈短歌ポスト〉入選作品（令和五年後期分）

選者 小塩卓哉（現代歌人協会理事）

## 【優秀作】

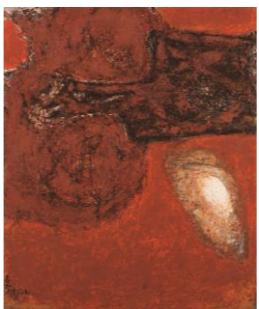
\*火の山にて飛ぶ鳥（軽井沢山荘にて）\*

白き鳥炎に焼かれ飛んでをりあれも私の魂ならむ

千葉県松戸市 河野 真南

〈評〉

「白き鳥」も、焼かれれば真っ赤な鳥となる。ヨーロッパから帰国した節子は、浅間山麓の軽井沢で、火の鳥の連作を描いた。自らの心象風景が象徴され、いとされるこの絵を前にして、作者もまた焼かれるような思いでこの絵を見ているのだろう。火の山は、浅間山から想起されたものだと言われている。節子の魂の叫びが、見る者の魂を動かしたのだとも言えよう。



三岸節子  
《火の山にて飛ぶ鳥(軽井沢山荘にて)》  
1960年 ©MIGISHI

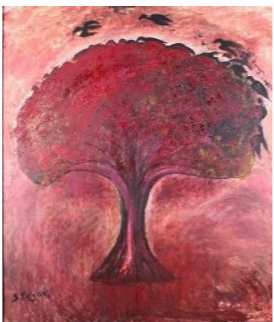
\*ブルゴーニュの一本の木\*

私には描きたきものが数多ある声の溢れる「ブルゴーニュの木」

北名古屋市 濱田 静江

〈評〉

「私には描きたきもの数多ある」という声は、節子の叫びだろうか。陸の孤島とも言われるフランスブルゴーニュ地方の小さな農村に拠点を移し、節子の心の中にはそんな声が溢れていたのだろう。そのような環境の中で生まれたのが、今作者が見ているこの絵なのだろう。節子の絵には、その絵を描いている時の節子の思いが声となって現れ出る雰囲気がある。



三岸節子  
《ブルゴーニュの一本の木》  
1995年 高輪画廊所蔵 ©MIGISHI

\*雲と海の対話（嵐）\*

暗雲の覆ひつくさぬその前に我を誘へ大海原へ

稲沢市 安田 一子

〈評〉

節子が描いた雲と海との対話の風景を見て、「我を誘え大海原へ」と作者は歌っている。確かにこの絵は、まだ完全には黒雲が空を覆い尽くしてはいない。漆黒の空となるのに、まだ時間があるから誘ってくれと言うのだろう。真っ黒な空と濃紺の海のと対比はまさに会話をしているようであるが、そのような絵画のテーマに対して作者が自分の主張を加えている点が新しい。



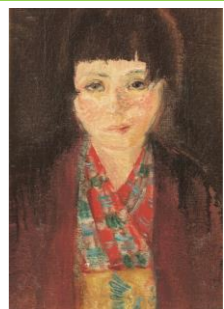
三岸節子  
《雲と海の対話（嵐）》  
1975年 ©MIGISHI

【佳作】

\*自画像\*

また来たの貴女の節赤あかに逢ひとみいたくて自画の瞳はいつも不安気

奈良県奈良市 神代 加代子

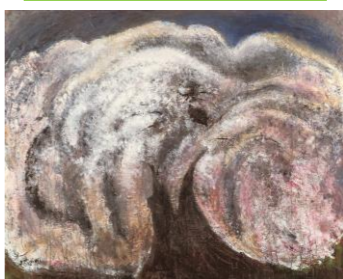


三岸節子《自画像》  
1925年 ©MIGISHI

\*さいたさいたさくらがさいた\*

満開の花は輝やき溢れみる散りゆく命秘めし華やぎ

石川県金沢市 鈴木 志津子



三岸節子  
《さいたさいたさくらがさいた》  
1998年 ©MIGISHI

\*もや\*

赤と黒調べにのりてアラベスク最果ての土なつかしの空

北海道札幌市 森 正人



三岸節子《もや》  
1937年 ©MIGISHI

\*静物\*

見たことのない色数あまた多胸を打つ節子に会いに来た甲斐ぞあり

北海道札幌市 古屋 稔



三岸節子《静物》  
1958年 ©MIGISHI

\*赤い地図\*

穏やかな笑みに秘めたる情熱のごとき深紅の地図に足止む

東京都大田区 長田 典子



三岸節子《赤い地図》  
1980年 高輪画廊所蔵 ©MIGISHI

\*飛ぶ鳥(火の山にて)\*

まんげつがかけることなくうつくしくめにみたものをえにかくすごさ

古知野中学校 一年生 勝田 奏渡



三岸節子  
《飛ぶ鳥(火の山にて)》  
1962年 ©MIGISHI

\*盾を持った武士\*

あついでどくにをまもるよへいわだないつもどおりでいられるしあわせ

南部中学校 三年生 大嶽 綾乃



三岸節子《盾を持った武士》  
1956年 ©MIGISHI